The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の第二関係節構造について ： 「さんまを焼く匂い」再考
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2000, 26, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10177
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

＜研究論文＞

日本語の第二関係節構造について

―「さんまを焼く匂い」再考 ―

中田　一志

1．第二関係節構造

本稿が考察の対象とするのは次のような構造であるが、この構造の位置づけには大きく分けて二説ある。

（1）さんまを焼く匂い

まず、基本的な日本語の名詞修飾節から見てみよう。一般に主名詞を修飾する節は三つに区別される。一つは（2）のようなものである。ここでは後続する主名詞「シュート」が修飾節「ペレが放った」の述語「放った」の対象であるという関係を持っている。このような関係を持つ修飾節は「関係節」（奥津 1974、井上 1976、成田 1994 ほか）などと呼ばれ[1]、またこのような修飾節と主名詞の関係は「内の関係」（寺村 1975）などと呼ばれている[2]。次に（3）のような修飾節である。そこでは主名詞「事実」と修飾節の述語「決めた」の間に（2）のような関係は見られず、ちょうど「代表がオリンピック出場を決めた」という修飾節が主名詞「事実」の内容を表す構造になっている。このような修飾節は「内容節」（奥津 1974、井上 1976、成田 1994 ほか）と呼ばれている。もう一つは（4）のような修飾節で、主名詞「裏」は「相手が守備をしている」ところを基準とした場所を指す。他に「そば」「前」「後ろ」など場所に関する名詞、「前」「後」など時間に関する名詞や「結果」などは、「相対名詞」と呼ばれる名詞を修飾するので、「相対名詞修飾節」（奥津 1974、井上 1976 ほか）と呼ばれている。また内容節と相対名詞修飾節は主名詞と「外の関係」（寺村 1975）を持つと言われることがある[3]。

（2）ペレが放ったシュートはゴールに吸い込まれていった。

（3）代表がオリンピック出場を決めた事実を彼は知らなかった。

（4）相手が守備をしている裏にパスを出した。

そして冒頭の構造の取り扱いであるが、一つの立場はこれを関係節（例えば（2））の変種と考え（奥津 1974、井上 1976、成田 1994 ほか）、もう一つは内容節（例えば（4））の変種と考える（寺村 1977b）。前者は（5a）のような解釈によって支持され、後者は（5b）のような解釈によって裏付けられる。

（5）a. 焼いたさんまの匂い

b.「さんまを焼く」＝「匂い」

（5b）の解釈をする立場では、このような修飾節を「擬似関係節」（井上 1976）あるいは「部分的同格連体名詞節」（奥津 1974）と呼ぶ。また（5b）の解釈をする立場ではこの種の修飾節に呼び名を与えないが、これを特別扱いする。普通の内容節が（3）' のように修飾節と主名詞の間に「という」が挿入できるのに対して、（1）' が示すようにこの種の修飾節はそれができない。他に「音」「気配」「味」「写真」「絵」などいわゆる「感覚にかかわる名詞」はこのような制約を持つとして特別扱いされている。

（3）'　代表がオリンピック出場を決めたという事実

（1）' ＊さんまを焼くという匂い

その他に機械翻訳の立場から考察した成田（1994）がある。これは（5a）の解釈を導く発想の原点と共通している。そこでは他の言語が標準的に持つ構造、例えば（2）のようなものを「第一関係節」構造と呼び、意味を保ちながら標準的な構造に還元変換することができるものを「第二関係節」構造と呼ぶ。第二関係節構造はさらに（6）に示した三つの系列に分けられる。

（6）a. 感覚的内容の補足を要求する系列（「におい」「音」「味」など）

b. 因果関係を表す系列（「（お）釣り」「残り」「痕／跡」など）

c. 位置関係を表す系列（「前」「上」「隣」「そば」など）

（7）の例は（6）の系列に対応する。構造還元とは左の第二関係節構造から右の標準的な第一関係節構造に変換することを言う。

（7）a.［さんまを焼いた］匂い　↔　［［焼いた］さんまの］匂い

b.［雪男が通った］足跡　↔　［［通った］雪男の］足跡

c.［相手が守備をしている］裏　↔　［［守備をしている］相手の］裏

我々は基本的にはこの考え方に従う。従って冒頭の例を関係節あるいは内容節と見るかについては、関係節と見る。その理由は次の通りである。意味を保ちながら（1）' のように標準的な関係節に還元できるということは動かしようのない事実であること。それに対して、「感覚にかかわる名詞」を特例措置として扱わなければならないことが（5b）の解釈の妥当性を一貫性のないものにしていること。このことにより（1）を関係節であると見る方がより整合的であると考える。

成田（1994）の理論は機械翻訳を第一義的な目的としたので、ぎこちない訳文を作ってしまうことがある。その原因は、主名詞と最も関係の深い名詞を関係節に求め、その名詞を標準の関係節構造の主名詞に据えるという統語的な操作をするからである。（8a）では「音」と関係の深い名詞は「（上の階の）子」であるので、それを主部に据えた（8b）のような構造に翻訳され、（8a）が実際に意味する「床＝天井から響く音」と（8b）の「上の階の子の音」にずれが生じる[4]。

（8）a.［上の階の子が飛び跳ねる］音

b.［［飛び跳ねる］上の階の子の］音

我々は「上の階の子が飛び跳ねる」と、接地面である「床＝天井」から音が発生するという関係を知っている。我々は機械翻訳を目的としないので、このようにかなり柔軟に関係節と主名詞の関係を捉える。また、本稿は（6c）を考察の対象から外し、（6a）と（6b）に絞って議論をすることにする。外す理由は、（6a）（6b）に比べると（6c）は関係節と主名詞の関係がかなり弱いと考えられるからである。（9a）（9b）が示すように（6a）（6b）の構造では二つの出来事が必然的な関係によって結ばれているのに対して、（6c）はそれよりも弱い相対的な関係によって結ばれている。

（9）a. さんまを焼いた匂い

さんまを焼く　→　さんまから匂いが出る

b. 雪男が通った足跡

雪男が雪道を通る　→　雪道に足跡が残る

また、（6a）（6b）の関係節構造がそれ自身である程度意味的に独立性があるので、（10a）（10b）のように意味的に希薄な述語をとることができるのに対して、

（6c）の関係節構造は（11a）が示すように形式的な述語だけでは不適格で、（11b）のように必ず実質的な述語を伴わなければならない。これが（6c）を本稿の考察の対象から外す理由である。

（10）a.　さんまを焼いた匂いがする。

　　b.　雪男が通った足跡がある。

（11）a.　＊相手が守備をしている裏がある／する。

　　b.　相手が守備をしている裏にパスを出す。

2．出現・発生系

我々と同様に柔軟な取り扱いをするものに高橋（1979）がある。彼の分類する五つの名詞修飾節のタイプの中に「関係づけのかかわり」があり[5]、これはいわゆる関係節構造にほぼ相当するものである。その下位に「参加者の関わり」「状況のかかわり」「後続者のかかわり」の三分類があり、（1）は「後続者のかかわり」として位置づけられる。これは我々の方向性と一致する。ここで彼の用語と我々が使用する用語が混同を招く恐れがあるので、もう少し詳しくこの「後続者のかかわり」について触れておく。

高橋（1979）は後続者という概念で関係節で表される出来事に時間的に後続して生じるものを一つに括っている。それらは、生産物、生じた状態、結果や応報である。（12）（13）（14）の「音」「におい」「わら」は生産物であり、（15）（16）の「恐怖」「るす」は生じた状態であり、（17）（18）の「名ごり」「返報」はそれぞれ結果や応報の例である。

（12）彼女がこしかけをひきよせる音や鍵台のふたをあける音…

（13）おもやでメザシをやくにおい…

（14）穂をこきおとしたわら…

（15）ひとをころした恐怖…

（16）ベニがふろへいったるす…

（17）水道の水でみがいた名ごり…

（18）自分があざむかれた返報…　　（以上、高橋（1979））

（15）（16）（17）（18）は先に述べたような理由でここでの対象としないが、我々

が出現・発生系の名詞とするのは（12）（13）の「音」「におい」であり、（14）の「わら」は次節で言及する状態変化系の名詞に分類する。その動機の一つは関係節の述語のル形、タ形のアスペクト的な意味の対立が（12）（13）にはないのに対して、（14）にはアスペクト的な意味の対立があるからである。

（12）' 彼女がこしかけを｛ひきよせる／ひきよせた｝音や鍵台のふたを｛あける／あけた｝音…

（13）' おもやでメザシを｛やく／やいた｝におい…

（14）' 穂を｛*こきおとす／こきおとした｝わら…

（12）'（13）' ではル形、タ形が持つ未完了、完了のアスペクト的な意味の違いがほとんど無意味なので、ル形・タ形どちらも適切な構造を生み出すのに対して、（14）' では積極的に完了の意味でタ形が用いられているので、それをル形で表現することが不適切である。

他に、出現・発生系の名詞の構造を特徴づけるものがあろうか。関係節の述語の項がその述語に対して何らかの意味役割を持つのは当然であるが、この構造ではそれと同時に（19a）が示すように主名詞と関係節の項の間に起点（source）の関係がある。しかし、（19b）が示すように（14）にはこのような関係がない。

（19）a. こしかけを　ひきよせた　音　→　音がこしかけから生じる
　　メザシを　やいた　におい　→　においがメザシから生じる
　　b. 穂を　こきおとした　わら　→　*わらが穂から生じる

（19a）の例はすべて関係節の述語の対象項（theme）が主名詞の起点となる例であるが、関係節の述語がとる他の項も主名詞の起点となることができるのだろうか。以下の小節で典型的な例の「におい」「音」を取り上げ、関係節の動詞別に考察する[6)]。

2．1　におい

においの発生には次の場合が考えられる。一つはある物質が状態変化を起こした結果、発生するにおいである。もう一つは揮発性であるがために状態変化なしで発生するにおいである。

前者の例では関係節に状態変化が表されている。述語は状態変化の他動詞ある

いは状態変化の自動詞であり、それぞれ目的語あるいは主語が述語の対象（theme）となり[7]、同時に主名詞の起点（source）となっている。(20)（21）の「炊く」「吸う」は状態変化の他動詞の例であり、(22)（23）の「焦げる」「腐る」は状態変化の自動詞の例である。述語の対象となる語（「ご飯」「たばこ」「ハンバーグ」「肉」）は主名詞「におい」の起点でもある。これは（19a）で見たのと同様である。

(20) ご飯を炊いた匂い

(21) たばこを吸った臭い

(22) ハンバーグが焦げる匂い

(23) 肉が腐った臭い

後者の例として、においの付着が関係節で表されるものがある。述語は状態変化ではなく位置変化を意味するものであり、(24)（25）の「塗る」「つける」のような他動詞や（26）の「付く」のような自動詞がある。これらの場合、においの起点となるのは関係節の述語の着点（goal）（「壁」「袖」「服」）であり、これは一種の場所性の項（locational）である[8]。

(24)（壁に）ペンキを塗った臭い

(25)（袖に）コロンをつけた香り

(26)（服に）香水が付いた匂い

次のようなものも後者の例である。

(27) ミカンを触った匂い

関係節の述語は接触・打撃の他動詞であり、その目的語である対象が主名詞の起点となっている。この動詞は変化を含意しない。状態変化あるいは位置変化を意味する動詞は例えば（20)'（24)' が示すように「てある」構文と相性がいいが、この動詞は（27)' が示すように「てある」構文と相容れない（影山 1996)。このことから分かるように、(27) のにおいは変化によって生じたものではなく、接触することによって付着したにおいと考えた方がよい。

(20)' ごはんが炊いてある。

(24)' ペンキが塗ってある。

(27)' ＊ミカンが触ってある。

他に後者に属する例として、(28)（29）のような関係節の述語が活動の自動詞である場合がある。この自動詞は接触・打撃の他動詞と同じく、変化を意味しないものである。このことは「てある」構文が不適格であることから明らかである。そうすると、このにおいは活動によってにおいが生じると考えるより、活動によって揮発性のにおいがまき散らされると考えた方がよい。においの起点に目を転じると、活動の自動詞の主語である動作主（agent）の項（「男達」「女優」）が主名詞の起点となっている。

(28)　男達が働く臭い

(29)　女優が通った残り香

(28)' ＊男達が働いてある。

(29)' ＊女優が通ってある。

以上、関係節の述語の動詞の種類別に、主名詞の起点となり得る述語の項を観察した。その結果、関係節の述語の動作主、対象、場所性の項が主名詞の起点となり得ることが分かった。

しかしながら、どんな時にもこれらの項が主名詞の起点となるわけではなく、例えば（20）（21）の動作主がにおいの起点となることは不可能である。においに対して持っている我々の概念が、そこからにおいが発生することを非常識であると認めるからである。逆に言うと、状態変化の対象、位置変化の着点、接触の対象、活動の動作主がにおいの発生源となるのは、においの中に状態変化の結果として生じるものや、揮発性のものがあり、揮発性のにおいが発生する可能性として、付着したり、接触したり、活動したりする時が認められるからである。このように主名詞の概念的な特性が構文に対して影響力があることをここに強調しておきたい[9)]。

2．2　音

音の発生には、ある物体に状態的な変化が生じ、その結果発生するものとなんらかの位置的な変化が接触をもたらし、その結果生じるものが考えられる。

前者のものとして次の例が挙げられる。関係節の述語を見てみると、(30）の「押しつぶす」のような状態変化の他動詞や（31）の「しなる」のような状態変

化の自動詞であり、ともに述語の対象（theme）である項（「空き缶」「ノコギリ」）が音の起点（source）となっている。

(30) 機械が空き缶を押しつぶす音

(31) ノコギリがしなる音

後者の位置的な変化によって生じる典型的な例としては（32）（33）の「打ち込む」「剥がす」のように関係節の述語が位置変化の他動詞であったり、（34）（35）の「ぶつかる」「抜ける」のように位置変化の自動詞である例である。音の発生の起点を考えると、例えば（32）（34）の「杭」「電柱」から単独で音が発生するわけではないので、（32）では「杭」と「地面」の接点、（33）では「マジックテープ」同士の接点、（34）では「車」と「電柱」の接点、（35）では「栓」と「ボトル」の接点が起点となる。つまり、（32）（34）では述語の対象と着点（goal）の接点であり、（33）（35）では対象と起点の接点であり、ともに対象と場所性の項（locational）の接点が音の発生の起点である。

(32) 杭を地面に打ち込む音

(33) マジックテープを剥がす音

(34) 車が電柱にぶつかった音

(35) 栓がボトルから抜ける音

位置的な変化以外で接触を伴うものとして、接触を伴う動作が関係節の述語で表されているものがある。その一つに（36）（37）の「鳴らす」「打つ」などの接触・打撃の他動詞がある。この場合、音の発生の起点は（36）では述語の動作主（agent）「客人」と対象「チャイム」の接点や（37）では道具（instrument）「バット」と対象「ボール」の接点である。他に接触を伴う動作として、（38）の移動の自動詞「歩く」や（39）の活動の自動詞「飛び跳ねる」が考えられる。ともに動作主と何か場所的な接点があれば、（38）の動作主「泥棒」と経路（path）「廊下」の接点や（39）の動作主「子供」と場所「床」の接点などがあれば、音が発生する。

(36) 客人がチャイムを鳴らす音

(37) 金属バットでボールを打った快音

(38) 泥棒が廊下を歩く足音

(39) 上の階の子供が飛び跳ねる音

以上、主名詞「音」の起点となる項が、述語のどの項であるかを観察した。前小節では主名詞が「におい」の場合は、関係節の述語の動作主、対象、場所性の項が起点となりうることを見たが、主名詞が「音」の場合は、単独で対象であったり、対象と場所性の項の接点、動作主あるいは道具と対象の接点、あるいは動作主と場所性の項の接点であったりする。このように主名詞の違いによってその起点が異なることは、まさしく、主名詞に対して我々が持っている概念がこの構造に大きく影響していることを物語っているのである。

2．3　まとめ

前二小節で典型的な出現・発生系の名詞である「におい」「音」がとる関係節の構造を観察した。そこで確認できたことは、主名詞の起点となる項は関係節の述語がとる項のうちどんな項でもいいのではなく、その選択に我々の主名詞に対して抱く概念が大きく影響することである。「煙」や「湯気」も出現・発生系のものであるが、(40) が示すように「吸う」「炊く」のような状態変化を表す述語を持つ構造は適格であるが、「におい」のように揮発性の可能性がないので、「付く」のような付着を表す述語や「通る」のような移動を表す述語を持つ構造は不適格である。(24) (28) などと比較されたい。

(40)　タバコを吸った煙
　　ご飯を炊く湯気
　　＊着物に付いた煙
　　＊蒸気機関車が通った煙

他にこの節で指摘したことは、出現・発生系の関係節の述語のアスペクトについてである[10]。この構造では述語のル形とタ形のアスペクト的な意味の違いが弱いという指摘をした。前二小節で挙げた例の中のいくつかを再検証してみよう。

次に挙げる例はすべてル形でもタ形でも自然であり、意味的な違いがほとんどない。

(21)' たばこを｛吸う／吸った｝臭い

(22)' ハンバーグが｛焦げる／焦げた｝匂い

(23)' 肉が｛腐る／腐った｝臭い

(31)' ノコギリが｛しなる／しなった｝音

(33)' マジックテープを｛剥がす／剥がした｝音

(34)' 車が電柱に｛ぶつかる／ぶつかった｝音

(36)' 客人がチャイムを｛鳴らす／鳴らした｝音

(37)' 金属バットでボールを｛打つ／打った｝快音

(39)' 上の階の子供が｛飛び跳ねる／飛び跳ねた｝音

ほとんどの場合はそうであるが、次の例のようにル形・タ形の対立があり、どちらかが不適格となる文も存在する。

(25)" コロンを｛*つける／つけた｝臭い

(27)" ミカンを｛*触る／触った｝匂い

(29)" 女優が｛*通る／通った｝残り香

(38)" 泥棒が廊下を｛歩く／*歩いた｝足音

ル形のアスペクト的意味が未完了を表し、タ形のアスペクト的意味が完了を表すことを念頭に置きながら、もう一度これらの例を見ると、ル形・タ形の対立がない場合は「におい」や「音」が状態変化や位置変化がまさに起こっている（未完了）時にも発生するし、変化が終わった（完了）時も発生している。このことが原因となって、その対立を弱めていると考えることができる。一方、ル形・タ形の対立がある例の「におい」や「音」は未完了時か完了時どちらかの時に発生するものである。(25)" (27)" の「におい」は付着や接触の途中段階のもの（未完了）を意味せず、付着した場所や接触したものに移ったもの（完了）を意味し、(29)" の「残り香」も通り去った（完了）後にあるものである。また、(38)' の「足音」は歩行中（未完了）でしか発生しない。(31) などのように残響音が完了時でも存在するものと比較されたい。

このようにこのル形・タ形の対立の有無は、出現・発生系の物質がどの時点で発生し得るか我々の概念に照らし合わせることによって予測可能である。この点でも出現・発生系の名詞の概念的な意味がル形・タ形の対立に影響を及ぼしているのである。

3．状態変化系

出現・発生系のものはその空間にまさしく出現・発生するものであるが、状態変化系は初期状態があり、それから推移するものである。関係節構造を見ると、初期状態からの変化過程が関係節で表され、変化後の姿が主名詞で表される。(14)（41）（42）の「わら」「酒」「料理」は関係節が表す変化過程の結果できるものである。

(14) 穂をこきおとしたわら…

(41) 米を醸造した酒

(42) 薄く切ったステーキにフォアグラを包んだ料理（内田 1997）

これらが次のような標準的な第一関係節ではないことを確認されたい。

(14)" わらをつくる稲

(41)' 酒をつくる米

(42)' 料理に使う薄く切ったステーキやフォアグラ

主名詞が変化後の状態を表すので、(14)' (41)" (42)" のように関係節の述語にはタ形が用いられ、ル形が用いられない。出現・発生系の物質は、ほとんどの場合、完了時でも未完了時でもそこに存在しているので、ル形・タ形の対立がなかった。それに対して、状態変化系のものは、どんな場合でも、状態変化が完了してはじめてその姿に変わるものなので、次のようにタ形しか用いられないことになる。

(14)' 穂を｛*こきおとす／こきおとした｝わら…

(41)" 米を｛*醸造する／醸造した｝酒

(42)" 薄く切ったステーキにフォアグラを｛*包む／包んだ｝料理

この構造に典型的な関係節の述語は、(14)（41）（42）の「こきおとす」「醸造する」「包む」のように状態変化の他動詞や、例は少ないが（43）の「発酵する」のような状態変化の自動詞である。

(43) 米が発酵した酒

また、(41) のように述語の対象項（theme）である「米」が主名詞「酒」に変化するものもあれば、(14)（42）のように述語の対象項におこる変化が再帰的にその本体をも変更して主名詞「わら」「料理」になるものもある。関係節の述語

が「着る」「装備する」などの再帰的な動詞になると、この関係節が果たして第二関係節なのか第一関係節なのか判別しにくくなる。(44) では「舞妓さんがきれいなべべを着た」のか、「きれいなべべを着」て「舞妓さん」になったのか、(45) では「スーパーカーが350馬力のエンジンを装備した」のか、「350馬力のエンジンを装備し」て「スーパーカー」と呼ばれる車になったのか。ともあれこれが二つの関係節のちょうど中間に位置づけられるようである。

(44) きれいなべべを着た舞妓さん

(45) 350馬力のエンジンを装備したスーパーカー

ここまで典型的な状態変化系の構造とその特徴を見てきたが、この構造の変種と見られるものがあるので、以下で詳しく観察することにする。

3．1　残り

状態変化の代表的なものは質的な変化であろうが、量的な変化もその一種である。量的に減少し、まだゼロになっていないものが「残り」である。通常、状態変化が起こった後の物体は「わら」「酒」などといったような呼び名が存在するが、量的な変化は普通物質的な変化を伴わないので、特別な呼び名がなく、「残り」で変化後を表し、主名詞となる。

そして、関係節には量的な変化を含意するような述語が用いられる。(46) (47) の「食べる」「使う」のような状態変化の他動詞や、(48) (49) の「半焼する」「こぼれる」のような状態変化の自動詞は、量的な変化を含意する述語である。量的な変化をするのは述語の対象項（theme）（「ご飯」「灯油」「アパート」「水」）である。

(46) ご飯を食べた残り

(47) 灯油を使った残り

(48) アパートが半焼した残り

(49) 水がこぼれた残り

位置変化の他動詞は対象のほか着点（goal）などの場所性の項（locational）を取るが、(50) (51) が示すようにこの構造ではその着点の残部を意味することができない。常に述語の対象項の残部を意味する。

(50) ペンキを（塀に）塗った残り

＝ペンキの残り、＊まだペンキを塗っていない塀の部分

(51) リボンを（幾つかの箱に）掛けた残り

＝リボンの残り、＊まだリボンを掛けていない幾つかの箱

例こそ少ないが次のように位置変化の自動詞でも対象項（「炭酸」）の残部を表すことができる。

(52) 炭酸が抜けた残り

他の場合を考えると、(53)（54）のように対象項をとらない活動の自動詞は不適格な構造を生み出すことになる。また、対象項をとる動詞でも（55）（56）のように接触・打撃の他動詞は状態変化を意味しないので、この構造では不適格である。よって、主名詞が「残り」の構造では量的な変化の対象が関係節の述語の項でなければならないということが言える[11]。

(53) ＊五合目に／まで登った残り（五合目から十合目までの意味で）

(54) ＊山道を歩いた残り（残りの山道の意味で）

(55) ＊娘が肩を叩いた残り（肩以外の場所の意味で）

(56) ＊息子が背中を揉んだ残り（背中以外の場所の意味で）

3．2　跡

状態変化系の構造では通常（14）の「わら」のように主名詞に変化後の姿そのものを表す名詞がくるが、(57) のような「跡」は変化後の姿そのものではない。また、「跡」を一種の出現・発生系のものだと考える向きもあろう。しかし、出現・発生系のものは「におい」や「音」のように独立したものであるのに対して、「跡」はそれだけで存在することなく、常に何かに付いているものであるし、(57)' が示すようにル形・タ形のアスペクトの対立があるので、出現・発生系のものとして扱いにくい。

(14) 穂をこきおとしたわら…

(57) コップをテーブルに置いた跡

(57)' コップをテーブルに ｛＊置く／置いた｝ 跡

それでは、「跡」だけを見るのではなく、「跡」がつく「テーブル」を見ること

にしてはどうだろう。関係節が表すような変化の結果「テーブル」に変化が生じる。つまり「跡」がついた「テーブル」になると考えると、状態変化系の構造の一種と考えることができる。

この構造の典型例は主名詞「跡」が関係節の述語の着点（goal）のような場所項（locational）につく例である。例えば（58）（59）の「鞄」「服」で、「貼る」「つく」のように付着を意味する位置変化の他動詞や自動詞が関係節の述語となっている。

（58）ステッカーを鞄に貼った跡

（59）カレーが服についた跡

他には、関係節の述語が接地面を含意するようなものが考えられる。接地面を含意すれば、（60）（61）の「つぶす」「焼ける」のような状態変化の他動詞や自動詞、（62）の「通る」のような移動活動の自動詞もこの構造に適しており、その場合、場所性のもの（locational）に「跡」がつく。

（60）ビルをつぶした跡地

（61）アパートが焼けた跡

（62）雪男が通った足跡

他に、接地面を含意するような述語は、（63）の「引っ掻く」のような状態変化の他動詞や（64）の「触る」のような接触・打撃の他動詞がある。この場合は関係節の述語がとる対象項（theme）（「ボディ」「金庫」）に「跡」が付着する。

（63）コインでボディを引っ掻いた傷跡

（64）犯人が金庫を触った指紋

さらに、接地面を含意すれば、（65）（66）の「昼寝をする」「頬杖をする」など一般の活動の自動詞でも可能であり、この場合は述語の動作主（agent）に「跡」が付く。

（65）畳の上で昼寝をした跡

（66）頬杖をしていた跡

3．3　まとめ

状態変化系の第二関係節構造では、主名詞に変化の後の姿が表され、関係節に

はその変化過程が表されていることを見てきた。また、変種として量的な変化の「残り」や再帰的な変化の「跡」を見た[12)]。

この変種の構造でも次のようにル形・タ形のアスペクトの対立があり、タ形が使用される。以下は前二小節で見た例の中のサンプルである。この対立は状態変化系の構造が持つ大きな特徴と指摘することができる。

(46)' ご飯を {*食べる／食べた} 残り

(50)' ペンキを（壁に）{*塗る／塗った} 残り

(60)' ビルを {*つぶす／つぶした} 跡地

(63)' コインでボディを {*引っ掻く／引っ掻いた} 傷跡

(65)' 畳の上で昼寝を {*する／した} 跡

また、「跡」は場所項（locational）や再帰的な動作主（agent）や対象項（theme）に付くが、一般的には状態変化系の主名詞は関係節の述語の対象が変化したものであると言える。このことは我々の状態変化に対する概念と合致している。そして、出現・発生系の構造ではその物質の起点（source）となるものが関係節の述語のどの項であるかは極めてその物質に対する我々の概念に敏感であったのだが、状態変化系の構造でも同様であることが分かる。

変種として挙げた二つのものは姿を変えて存在している。「残り」と同じように考えられる例は（67）のようなものである。「絶壁」は「崩れ」て残った形であり、「お釣り」は「切手を買う」のに払った「お金の残り」のことである。

(67) 地震で岬が崩れた絶壁

切手を買ったお釣り

「跡」と同様に考えられる例は（68）のようなものである。「えくぼ」は「顔」にでき、「折り目」は「紙」につき、「飛行機雲」は「空」に描かれる。

(68) にっこり笑ったえくぼ

紙を二つに折った折り目

セスナが飛んだ飛行機雲

最後に（69）も状態変化系の構造だと考えることができる。関係節で表される「赤ん坊ができる」ことが変化であり、その結果、「結婚していない二人」が「結婚する二人」になることをこの例は意味している。

(69) できちゃった結婚

結婚していない二人 ⟶ 結婚する二人
↑
赤ん坊ができる

4．感覚（触覚）

我々は「におい」や「音」を出現・発生系のものに分類しているが、奥津(1974)、井上（1976)、寺村（1977b)、成田（1994）ほかはこれらのような名詞を感覚名詞と呼んでいる。議論に入る前にこの用語の使用法の違いから明らかにしなければならない。

これらの論文で言及される感覚名詞は、感覚器官が知覚する対象のことである。臭覚の対象の「におい」、聴覚の対象の「音」、視覚の対象の「姿」、味覚の対象の「味」や触覚の対象の「感じ」である。

我々の感覚（触覚）名詞はそうではなくて、感覚そのものを表す名詞である。臭覚、聴覚、視覚、味覚、感覚（触覚）の中で、(70) が示すように第二関係節構造の主名詞になれるのは感覚（触覚）のみである。

(70) ＊さんまを焼く臭覚（さんまを焼く匂い）
＊ドアを叩く聴覚（ドアを叩く音）
＊鯨が飛び上がる視覚（鯨が飛び上がる姿）
＊しょうゆが焦げた味覚（しょうゆが焦げた味）
虫が背中をはう感覚／感触／感じ

感覚（触覚）は、感覚（触覚）器官が知覚した内容が即認識した内容にまで至らないという特異性を持っている。よって感覚（触覚）は最初の刺激から認識に至るまでのその器官に生じる変化過程を感じることができる。他の感覚は鼻、耳、目や舌という限定された部位によって知覚されるのに対して、感覚（触覚）は広範囲にわたる皮膚という総合的な感覚によって知覚されるものであるからであろう。皮膚が起こる前と起こった後の感覚の違いを感じることができるからこそ、状態変化系の構造と同じように、(71) のように主名詞に状態変化後の感覚を明示的に表わせるのである。

(71) 腕をへし折られた痛さ

顔に化粧水をつけたさっぱり感

小一時間泳いだ心地よい疲れ

我々の感覚（触覚）名詞は次のように規定される。

（72）感覚（触覚）名詞：　感覚の変化をとらえる名詞

（例）痛さ、さっぱり感、疲れ、感覚、感触、感じ

このような主名詞をとる関係節には感覚の変化やそれをもたらす感覚主（experiencer）に対する作用を記述しなければならない。（73）の「焼ける」は状態変化の自動詞によって感覚主に生じる変化を表し、（74）の「くすぐる」は接触・打撃の他動詞によって感覚主にたいする作用を表す。また、これらの場合、感覚変化が生じるのは関係節の述語の対象（theme）（「肌」「足の裏」）であり、同時にその変化は再帰的にその本体の感覚主に変化をもたらす。

（73）肌がじりじりと焼ける感覚

（74）だれかが足の裏をくすぐる感覚

感覚変化が述語の場所項（locational）に生じる例もある。（75）（76）の「貼る」「突きつける」のような位置移動の他動詞であるが、位置移動の結果、その着点（goal）（「足」「背中」）に接触が伴い、それが感覚主の感覚的な変化を生み出す。（77）の「動く」のような移動の自動詞もその経路（path）（「脇」）が感覚主の身体部分であれば当然そこに接触が生じ、それが感覚主に感覚的な変化を生じさせる。

（75）看護婦さんが足に湿布を貼る感触

（76）背中に包丁を突きつけられた感覚

（77）看護婦のカミソリが脇を動く感触　（寺村 1977b）

他に、関係節の述語の動作主（agent）自体が感覚主になる例もある。（78）の「つぶす」のような状態変化の他動詞の場合は、動作主が対象の状態変化を起こすとき接している部分でその変化を感じる。また、（79）の「触る」のような接触・打撃の他動詞や（80）のような「はう」のような経路移動の自動詞の場合は、動作に伴う接触感を感じる。

（78）エアクッションをつぶす感覚

（79）高級絨毯を触った感覚

(80) 針のむしろをはう感じ

このように主名詞が感覚（触覚）名詞である時、当然の事ではあるが、感覚主との接触がある出来事が関係節で表されなければならない。

最後に、関係節の述語がル形・タ形の対立を持っているかどうかについて考えてみよう。例をみると、対立はありそうである。しかし、状態変化系の構造で完了のタ形が専ら好まれるのとは違って、感覚（触覚）名詞の構造では次の例が示すように完了のタ形と未完了のル形のどちらかを選ばなければならない。出現・発生系の構造で、ほとんどの場合ル形・タ形のどちらでも意味的な違いなく使えたのとも違う。

(73)' 肌がじりじりと｛焼ける／?? 焼けた｝感覚
(78)' エアクッションを｛つぶす／?? つぶした｝感覚
(74)' だれかが足の裏を｛くすぐる／?? くすぐった｝感覚
(75)' 看護婦さんが足に湿布を｛貼る／?? 貼った｝感触
(77)' 看護婦のカミソリが脇を｛動く／?? 動いた｝感触
(80)' 針のむしろを｛はう／?? はった｝感じ
} A

(76)' 背中に包丁を｛?? 突きつけられる／突きつけられた｝感覚[13)]
(79)' 高級絨毯を｛?? 触る／触った｝感覚
} B

上の例を（A）（B）に分けると、両者の感覚に違いがあることが分かる。（A）の例の感覚は状態変化が起こっている最中の感覚や触れている間の感覚の変化を指す。その時、述語はル形をとる。（B）の例のそれは触れた瞬間に起こる感覚の変化を指す。その時、述語はタ形をとる。

以上から主名詞が感覚（触覚）名詞の構造を特徴づけるとすると、この構造は一種の状態変化系の構造であるが、感覚的な変化過程だけでなく触れた瞬間の感覚も表せるという特異性を持っていると言える。

5．空間的位置づけと時間的位置づけ

これまでの観察を通して第二関係節構造が主名詞に対して我々が持っている概念に非常に影響されるものであることが分かった。主名詞と関係節の意味的な関係もそうである。それは関係節の述語のどの項が主名詞と関係を持つかというこ

とを見れば分かった。また、関係節の述語のアスペクト的意味に関わるル形・タ形の選択もそうである[14]。

それでは我々はどのように出現・発生系の構造と状態変化系の構造を峻別しているのか[15]。

出来事を時間軸に位置づけると、時間の推移に関わらず、不変の出来事であれば状態性であり、時間の推移に伴って動作が継続すれば動作性であり、時間の推移に伴って変化が生じれば変化性である。我々が見てきた二つの構造のうち、状態変化系の構造が変化性の出来事を表しているということは否定しようがないが、出現・発生系の構造は状態性のものでもなく、動作性のものでもないので、消去法でいくと変化性の出来事となる。

出現・発生系の構造の特徴をつかむために、例えば煙が発生している状況を仮定しよう。ある空間における煙の量を測定したとすると、普通煙のようなものは一定して放出されるわけではないので、その値は時間的に変化しているはずである。しかし、この時間的な値の変化は出現・発生系の構造では意味がなく、煙の存在の有無のみが意味を持つ。存在構文が必須項として場所項を必要とするのと同じように、この構造も主名詞の起点を関係節の述語の項に求める。存在を認めるのには空間的な位置づけが必要であるからである。(81a) は「噴煙」の存在が「ロケット」による空間的な位置づけによって保証されるので適格であるが、「発射ボタンを押すとロケットが発射して噴煙が立ちこめる」という状況を (81b) のように表現できない。それは「(ロケットの) 発射ボタン」で「噴煙」の空間的な位置づけができないからである。

(81) a.　ロケットを発射した噴煙

b. *(ロケットの) 発射ボタンを押した噴煙

一方、状態変化系の構造では変化後の姿（状態）が主名詞に表されていなければならない。(14) の「わら」は「稲」の変化後の姿であるので適格文を生み出す。しかし、(82) の「虫歯」は「正常な歯」の変化後の姿であろうが、関係節は「歯」に関する変化過程が記述されてないので不適格である。(82)' のように関係節の述語の動作主が「普通体の人」から「お腹が出た人」になったという意味であれば、ちょうど「跡」の構造のように「お腹」を主名詞にして適格文を作

ることができる。(83) の「落第」は「遊びほおけた」結果であろうが、この人物の変化後の状態ではない。例えば、(83)' の「ならず者」のようにすれば適格になる[16]。

(14)　穂をこきおとしたわら

(82) ＊甘いものを食べ過ぎた虫歯　（白川 1986）

(83) ＊悪友と遊びほうけた落第　（白川 1986）

(82)'　甘いものを食べ過ぎたお腹

(83)'　悪友と遊びほうけたならず者[17]

存在と状態は関係節の述語のル形・タ形の選択にも関わっている。(14) のように関係節の述語にタ形が使われる状態変化系の構造では変化して状態がどう変わったか、どの時点で変化が達成したかということに敏感である。存在の有無が問われるのではなく、時間に位置づけられた値の変化が問題になるのである。

一方、関係節の述語のル形・タ形の対立がない出現・発生系の構造では物質が空間に存在するか否かが問題であるので、たとえば (22)' では「ハンバーグ」の「匂い」は焦げている（未完了）時でも、焦げた（完了）時でもその空間に存在し、よってどちらの形式も適格である。空間に発せられる物質は普通一旦発せられた後も存在するのが普通なので、たいてい未完了時と完了時の時間的な違いは存在には影響しないからである。(38)' の逸脱性は例外的に「足音」が止まると聞こえなくなるという時間に敏感な性質を持つことに帰因する。

(22)' ハンバーグが｛焦げる／焦げた｝匂い

(38)' 泥棒が廊下を｛歩く／＊歩いた｝足音

最後に、空間的な位置づけと時間的な位置づけに関して感覚（触覚）名詞の構造を考えてみよう。この構造では持続的な感触と瞬間の感覚の両方を表すことができるが、時間的には (73)' が示すような感覚的な変化の過程（未完了時）か、または (76)' が示すような接触した時点（完了時）のどちらかに限られる。よって、この構造は状態変化系とは少し異なるが、時間的に位置づけられなければならないという特性を持つことは共通している。

(73)' 肌がじりじりと｛焼ける／?? 焼けた｝感覚

(76)' 背中に包丁を｛?? 突きつけられる／突きつけられた｝感覚

また、関係節の表す出来事に感覚主との接触がなければこの構造が成り立たないので、この条件によってこの構造は常に「肌」や「背中」といった感覚主の身体部位に空間的な位置づけがなされていることになる。この構造は関係節の表す出来事が時間的に位置づけられ、かつ主名詞が空間的にも位置づけられているからこそ、関係節の述語の形式の振る舞いが出現・発生系の構造と状態変化系の構造の述語の形式の振る舞いを折衷したような特徴を持っているのである。出現・発生系の構造でル形・タ形の対立がある例外があることを見たが、それはちょうどこの構造と同じように空間的な位置づけだけでなく、時間的にも位置づけられるという面を持つからである。

このように関係節の述語の時間的な位置づけと主名詞の空間的な位置づけによって、我々は第二関係節構造を分類することができ、さらに関係節の述語のテンス形式の選択性についても予測することができることを見た。それを表の形にしたのが次の通りである。

	時間的位置づけ	空間的位置づけ	ル形・タ形の対立
出現・発生系	弱	強	－
状態変化系	強	弱	＋（タ形のみ）
感覚（触覚）	強	強	＋（ル形かタ形のいずれか）

注

1）益岡・田窪（1989）では統語的な点をさらに強調して、これを「補足語修飾節」と呼ぶ。

2）「内の関係」を中心的に扱ったものが寺村（1977a）である。そこでは「内の関係」はいわゆる「関係節構文」より広い範囲に渡るものであるとコメントし、本文で挙げたような関係節構文だけでなく、次のようなものも「内の関係」に含めている。

the house standing on the hill （↔ the house stands on the hill）

the thing for you to find out （↔ you find out the thing）

the last man to come （↔ the man came last）

the white house （↔ the house is white）

3）「外の関係」を中心的に扱ったものが寺村（1977b）である。そこでは「外の関係」

はいわゆる「同格節構文」より広い範囲の渡るものであるとコメントし、本文で挙げたような同格節構文だけでなく、次のようなものも「外の関係」に含めている。

the year before he died

the smell of something burning　(the smell ＋ something burns)

the result of his death　(the result ＋ he died)

4）成田（1994）はこのずれを認めながら、この構造還元変換の有意義性を主張している。ずれの不可避性については次のように説明する。第二関係節では「状況、内容の生の描写的な記述があって、その中の一要素に強く結び付いた現象やものが主部の位置に配される」。これに対し、第一関係節では「状況、内容が一旦論理的に整理されて、これが主部を中心とする名詞概念で表現される」(p. 87) のである。このように、言語形式にはそれぞれ固有の文体的意味があり、言語形式が変われば意味にも相応の変異が生ずるというのは、言語形式と意味の関係として一般に認められることである。そして、次のように省略部を補うような規則を設定するのは、システム的な観点からはどう見ても応急処置に過ぎないとして認めない。

［上の階の子が飛び跳ねる］**時に出る**音

5）高橋（1979）の名詞修飾節構造の分類には「関係づけのかかわり」の他、「属性づけのかかわり」「内容づけのかかわり」「特殊化のかかわり」「具体化のかかわり」がある。関係づけのかかわりは本文で述べたように、関係節構造にほぼ相当し、「名詞のさししめすものごとを、それが、参加者、状況など、一定のやくわりでかかっている動作や状態と関係づけるかかわりである」(p. 99)。属性づけのかかわりは「そのものがどんな属性をもっているかをしめすかかわりであ」り、「特定の時間に限定されない動作であったり、動作からきりはなされた状態であったりして、特定の時間におこる動作ではない」(p. 109) 事柄を関係節は表す。関係づけのかかわりは (a) のように特定の時間におこる動作を修飾節が表すが、属性づけのかかわりは (b) のように特定の時間に起る動作ではない。もともと関係節という考え方ではテンスの強弱はあまり問題にしないので、このかかわりも関係節構造の一種である。

a）<u>帰国するグットネル</u>といっしょにモスクワへきた。

b）<u>自炊する浴衣客</u>がおおい。

内容づけのかかわりは「名詞が、言語活動、心理活動、表現活動などをあらわし、動詞句がそれに内容をあたえるかかわりであ」り、「動詞句が現実反映の内容的な側面をあらわし、名詞が形式的な側面をあらわす」(p. 123)。これは内容節構造にほぼ相当する。次のようなものである。

c）<u>いなかの士族のますますれいらくしていく話</u>などを…

特殊化のかかわりは「名詞が上位概念をあらわしていて、連体句がその下位概念で、

それを特殊化するかかわりである」(p. 127) という特徴を持っているが、(d) のような内容節構造に分類されるものも多くある。具体化のかかわりは「ようす、ていど、方法などをしめす抽象名詞に対して、どのようなできごとやうごきを抽象したものであるかをしめすかかわりである」(p. 130) という特徴を持っているが、(e) のような状況的な関係節構造に分類されるものも多数ある。

d) 一回の衝突で同時に多数の粒子があらわれる現象

e) はにかみをおびたかおつき

6) 本稿では概ね影山（1996）の動詞分類に従う。そこでは構文に反映される意味的な特徴から動詞を分類している。その大きな特徴とは、状態性（BE）、変化（BECOME）、継続活動（ACT）、使役（CONTROL）の四つである。それにより動詞は、状態性をもつ状態動詞、状態的な結果を伴う変化をあらわす非対格動詞、働きかけの対象をもたず継続活動が可能な非能格動詞、働きかけの対象を持ちながら継続活動が可能な接触・打撃他動詞、そして、使役的な働きかけで状態変化を起こさせる使役他動詞の五種類に分類される。第二関係節構造を考える際、抽象的な状態変化を表すか物理的な位置変化を表すかを区別した方がよい場合が多いので、非対格動詞を状態変化の自動詞と位置変化の自動詞に分け、使役他動詞を状態変化の他動詞と位置変化の他動詞に分けている。このような分け方は折に触れて影山（1996）でもなされているものである。非能格動詞は活動の自動詞と呼び、接触・打撃の他動詞と区別するのは同様である。ただし、第二関係節構造ではその関係節の述語が状態述語の例がないので省いている。ここに我々が扱う動詞の種類を例とともに挙げる。

状態変化の自動詞（倒れる、壊れる、焼ける、焦げる、など）
位置変化の自動詞（くっつく、ぶつかる、抜ける、など）
状態変化の他動詞（吸う、焼く、炊く、食べる、など）
位置変化の他動詞（くっつける、塗る、剥がす、など）
活動の自動詞（飛び跳ねる、歩く、働く、など）
接触・打撃の他動詞（叩く、触る、なでる、こする、など）

7) Perlmutter（1978）、Burzio（1986）に非対格性の仮説で、非対格動詞の主語は統語構造（D構造）において目的語相当として規定されている。

8) 場所性の項（locational）を一まとまりとして考えるのに意義があることはMatumoto（1996）のThe Shared Figure Conditionでも示されている。この規則は日本語の動詞の項構造（AS）はその場所性の項が違う実体を指す場合、二つ（以上の）場所性の項（場所項（locative）、起点（source）着点（goal）など）をとることができないというものである。これにより説明できる現象の一例は（b）に非文法性である。

a）ジョン［そこにゴミを捨てて］学校に行った。

b）ジョンは（*学校に）そこにそのゴミしか捨てていかなかった。

9）本稿は理論的枠組を用いず、記述的に分析することを目的としているが、背景には語彙概念構造（LCS）の考え方がある。語彙概念構造は1970年代の生成意味論の意味構造の分析を発展させたJackendoff（1990）などが主として英語の動詞を対象として発展させた理論である。この理論は外界と言語の間のインターフェイスとして、概念的な意味と統語構造に反映する項構造（AS）（Grimshaw 1990ほか）とを結び付けるものである。語彙概念構造による日本語の動詞に意味論に関しては影山（1996）、Matsumoto（1996）、松本（1998）が代表的である。

10）工藤（1989）は次の三つの構文的条件に応じて、従属節におけるテンス、アスペクトの対立が異なることを指摘している。①主文の動詞が「思う、考える」のような知的認識活動を表すか、「言う、知らせる」のような伝達活動を表す場合。②主文の動詞が「見る、聞く」のような知覚活動を表す場合。③「行く時、食べた時」のように、「トキ（ニ、ニハ、ハ）」の前に位置する場合。そこには第二関係節のテンスやアスペクトに関する観察はなされていないが、②に関する考察は本稿のものと共通する部分がある。②に関して次の特徴が挙げられている。

a）知的認識動詞の場合と異なり、テンスの分化＝対立がなく〈同時〉のみである。

b）しかし、アスペクトの分化＝対立はある。基本的にはスルとシテイルが〈ひとまとまり性〉か〈持続性〉かで対立する。これは、動作動詞、変化動詞どちらにもある。

c）主体変化＝限界動詞では、スルとシタが〈限界達成の有無〉で対立することもある。

我々が対象とする構文も（a）（c）の特性を持つ。

11）場所性の項の残部を表す例はないこともない。次の例では「クラブの残り」を意味しており、「クラブ」は述語「抜ける」の起点である。しかし、この例では「クラブ」は場所的な意味が希薄になっているということが指摘できる。

我々は5人の部員が抜けた残りで乗り切るほかない。

12）本稿では「跡」を状態変化系の名詞の変種として扱ってきたが、内田（1997）は因果関係を表す名詞修飾構造を次のような五つに分け、これをその（c）に分類している。この分類の動機付けはここに挙げる主名詞の特徴的な意味によるようである。修飾節の述語の形式に関して、（d）のタイプは例外的にタ形をとる例もあるが、ル形をとる場合が多いとし、それ以外はタ形しかとらないとしている。

a）あることがらに応じて生じることがら

（例）反動、罰、仕返し、など

b）あることがらによって、もともと存在する物質の上に付加されるかたちで生じるもの

（例）汚れ、傷、跡、など

c）あることがらによってもともと存在したものの一部が無くなったとき、なお引き続いて存在している方の部分

（例）残り、余り、おつり、など

d）事態全体の中の一部を抽出したもので、感覚の対象を表すもの

（例）音、匂い、煙、など

e）あることがらが起こったり、ある状態にいる結果生じる心の状態を表現するもの

（例）悲しみ、喜び、怒り、など

述語の形式の選択に関してはその通りであるし、この意味的な分類も確かにこにようなものが存在する。しかし、本稿では（a）（e）を統語的な振る舞いが他と違うという積極的な理由で除外するが、残りのものに関してはさらに有意義な関連性や連続性を見いだすことができる。（b）（c）がともに状態変化系という共通する特徴を持ち、（14）（42）のような一般名詞「わら」「料理」と同列のものであること。あとで見るように、（d）に分類される「感覚」や「接触」がとる修飾節に述語に形式が他の「音、匂い、煙」が持つ出現・発生系の特徴と（b）（c）が持つ状態変化系の特徴の二面性を持つことなどである。

13）ル形が不自然ではないという文法性判断をする人がいた。その人にル形の場合もタ形の場合も出現・発生系の場合のように同じ解釈になるか尋ねたところ、解釈的には異なるということだった。ということはル形を自然に感じる人はちょうど（75）の「貼る」のように持続的な感覚として解釈しているということで、本稿の議論に特に影響を及ぼさない。

14）連体修飾節の述語のタ形について議論したものに金水（1994）がある。これは、日本語には連体修飾節に現れるタ形に次のような三つの用法があるが、過去のタ形と形容詞的なタ形の構造的な違いについて分析したものである。

a）彼女が去年のパーティーで<u>着た</u>着物を覚えていますか。（過去）

b）彼女は一度<u>着た</u>着物は二度と着ない。（既然／完了）

c）派手な着物を<u>着た</u>女性が近付いてきた。（形容詞的）

そこでは（c）のような形容詞的なタ形は、語彙部門に作用し述語の結果の状態を焦点化させるために付加されたもので、（a）のような時制のタ形は時制解釈のため統語部門に作用し、D構造に付加されたものであるという指摘がされている。影山

(1996) でも語彙部門に関して同様の分析がなされている。これらには本稿が扱うような第二関係節構造については分析されていないが、この構造のタ形の位置づけは一筋縄ではいかないようである。主節の述語の時制をもとに考えると (d) (e) (f) の関係節の出来事はそれ以前を表すが、(a) のような過去時制とは言いにくい。また、(c) の「着た」を状態的な「着ている」に替えても同じ意味を表すが、(d) は「炊いた」を「炊いている」に替えることができるが、(e) (f) はできない。

d) ご飯を炊いた匂いがしてきた。

e) 車が電柱にぶつかった音が聞こえた。

f) 米を醸造した酒を飲んだ。

本稿の考察は句を単位にして論を進めている。なぜならばこのような動詞的な時制の解釈や形容詞的な解釈は他の何らかの要素と相まって副次的に決定される場合があるという予測によるからである。この動詞性に関しては別稿に委ねたい。

15) 出現・発生と状態変化を言語学的に区別する必要性に関しては影山 1996 に触れられている。そこでは英語では状態変化の動詞が away と共起するし、日本語では状態変化の動詞は「～切る」「～上がる」との複合語を形成することができるのに対して、出現・発生動詞はそれができないことが示されている。

a) fade away, rot away, thin away, wither away, vanish away
*occur away, *happen away, *appear away, *disappear away

b) 腐り切る、弱り切る、焼き上がる、炊き上がる
＊ニキビができ切る、＊事故が起こり上がる、＊事件が発生し切る、＊幽霊が現れ上がった

16) 白川 (1986) は主名詞が関係節の表す出来事と連続的な状況の中で同定できるものでなければならないという制約でこの二つの例の不適格性を説明する。つまり、「甘いものを食べ過ぎた」あと、すぐそこに「虫歯」が生じているわけではなく、「悪友と遊びほうけた」場合、その場で落第を宣告されるわけではない、と。「虫歯」も「落第」も関係節に表された出来事となんらかの因果関係を持つので連続性を否定することはできない。さらに厳しく主名詞が関係節が表す出来事と継起的な状況の中で同定されなければならないとすると、この例の非文法性は説明できるが、(82) (83) の文法性は説明しにくくなる。

17) この例を第一関係節構造であると考えることも可能であるが、(44) (45) のように第一関係節構造と第二関係節構造の中間に位置づけられるものである。特に主名詞が人を表すような場合にはこの傾向が強いようである。

参照文献

井上和子 1976『変形文法と日本語　上』大修館書店

内田安伊子 1997「「因果連体修飾表現」について」『日本語学・日本語教育論集』4: 111-131　名古屋学院大学留学生別科（日本研究プログラム）

奥津敬一郎 1974『生成日本文法論』大修館書店

影山太郎 1996『動詞意味論』くろしお出版

金水敏 1994「連体修飾の「～タ」について」田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現』: 29-65　くろしお出版

工藤真由美 1989「現代日本語の従属文のテンスとアスペクト」『横浜国立大学人文紀要第二類　語学・文学』36: 1-24

白川博之 1986「連体修飾構文の状況提示機能」『言語学論叢』5: 1-15　筑波大学一般応用言語学研究室

高橋太郎 1979「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」『言語の研究』: 75-172　麦書房

寺村秀夫 1975「連体修飾のシンタクスと意味1」『日本語・日本文化』4: 71-119　大阪外国語大学留学生別科

_____ 1977a「連体修飾のシンタクスと意味2」『日本語・日本文化』5: 29-78　大阪外国語大学留学生別科

_____ 1977b「連体修飾のシンタクスと意味3」『日本語・日本文化』6: 1-35　大阪外国語大学留学生別科

成田一 1994「連体修飾節の構造特性と言語処理」田窪行則（編）『日本語の名詞修飾表現』: 67-126　くろしお出版

益岡隆志・田窪行則 1989『基礎日本語文法』くろしお出版

松本曜 1998「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83

Burzio, Luigi. 1986. *Italian Syntax: A Government Binding Approach*. Dordrecht: Reidel.

Grimshaw, Jane. 1990. *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Jackendoff, Ray S. 1990. *Semantic Structures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Matsumoto, Yo. 1996. *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. Stanford, California: CSLI Publications, Tokyo: Kurosio Publishers.

Permutter, David. 1978. "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *BLS* 4: 157-89.

〈キーワード〉第二関係節，出現・発生，状態変化，感覚（触覚），空間，時間

On the Secondary Relative Clause in Japanese

Hitoshi NAKATA

This paper deals with the secondary relative clause construction in Japanese, such as *"samma-o yaku nioi"* (the smell of a saury burning). First, it is demonstrated that this construction is sensitive to being affected by the conceptual meaning of NP in the head position, which has been found through the observations of the predicate in the subordinate clause, its behavior relevant to the head NP, and the different predicate forms of the clause (namely *-(r) u* or *-ta*, imperfective or perfective respectively). In terms of the semantic relations between the argument of the predicate in the clause and the head NP, the secondary relative clause is subcategorized into occur-type, change-type, and touch-type; each of these has a characteristic feature in the choice of predicate form reflecting aspectual meaning. In the end, all the phenomenon observed are well explained by checking the two phases of the event expressed by the construction, anchoredness in time and anchoredness in space.